

Raffiné Journal vol.09



音への触れ方に出るもの

人は、
動く前に、すでに出ている。

触れた瞬間ではなく、
触れに行く前に、
その人は空気として滲んでいる。

あるダンサーの踊りを見たとき、
最初に気になったのは、動きではなかった。

場に立った瞬間、
わずかに空気が変わる。

まだ何もしていないのに、
すでに輪郭だけが現れている。

その状態のまま、
音に触れに行く。

動きが始まる前に、
すでに、その人は出ている。

音に入る瞬間、
身体は流れに乗らない。

音へ、直接触れに行く。

動きは音の中に置かれず、
接触としてつくられる。

押し出すような力だけが、
先に出ていた。

その接触は、続かない。

強く触れる瞬間と、
圧が抜ける瞬間が、交互に現れる。

流れの中にいながら、
関係は持続しない。

音と身体のあいだの距離だけが、
絶えず揺れていた。

滑らかに通る瞬間もある。

だが、その状態は残らない。

ある地点から、
動きではなく、接点だけが前に出る。

触れ方の粗さが、
そのまま現れる。

それは技術ではない。

内側にある力が、
整わないまま触れている。

表現は、
何をするかではなく、
何にどう触れてしまうかで決まる。

音は逃げない。

触れ方だけが、残る。

最初に現れた空気と、
その触れ方は、ずれていなかった。

人は、
どう触れてしまうかで、その人が出る。

Raffiné Journal vol.09
2026

美学思想家
古川玲奈

発行：Raffiné